

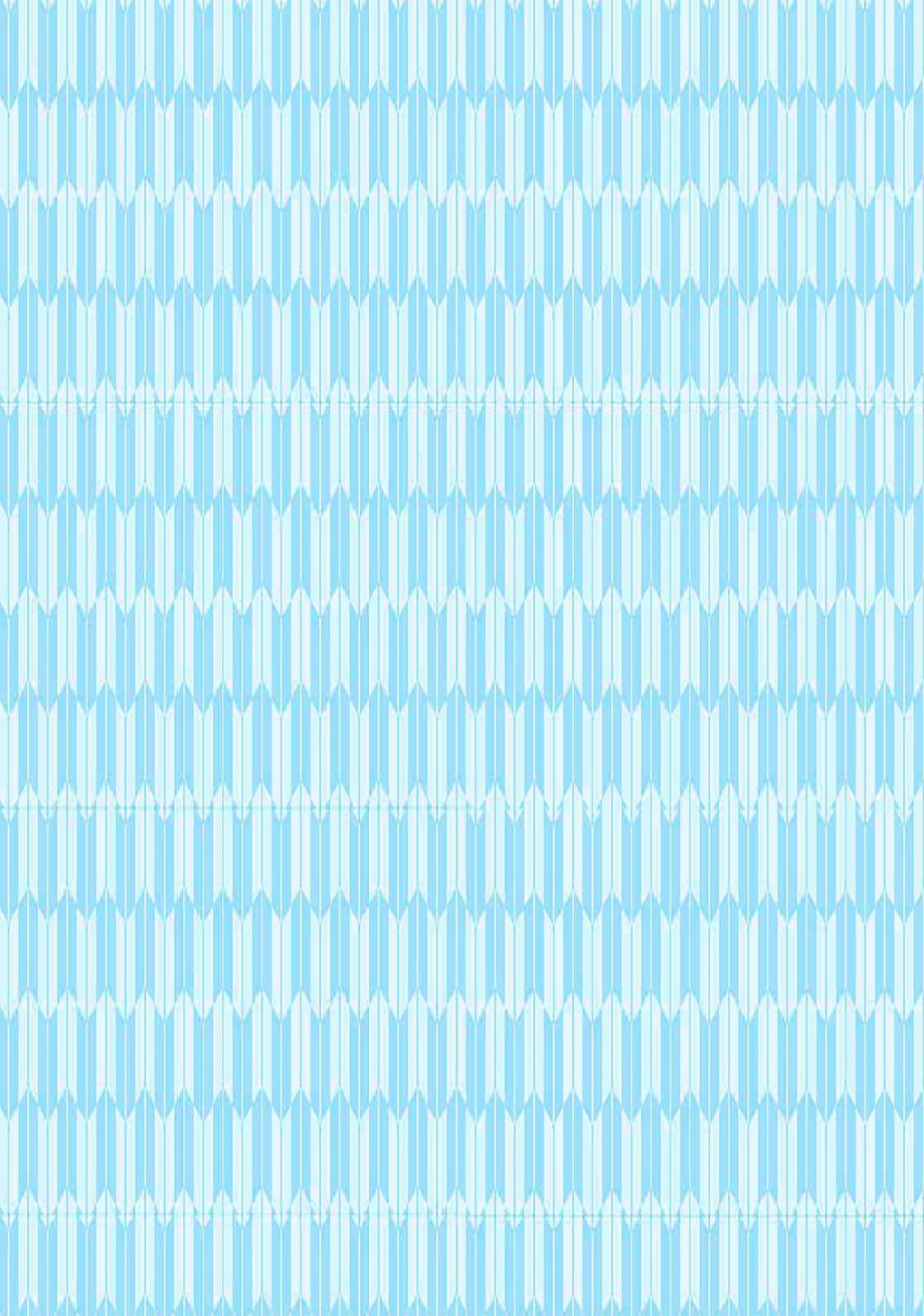
あそ

2

2024



春の夜を  
道成寺村の  
旅籠屋の  
布團なまめき  
いねがてぬかも



独活の花七十古来  
稀ならず

佛童子



亀田虎童子 筆

あそ

二月集

THE・俳

佐藤  
竹僊

起きぬ顔しばらく見てて秋はゆく

軽トラで刺身を造る秋燈

竹林に一燈のあり秋の晝

ミサイルは平和の徴冬はじまる



冬の日の蟻が読んでみさうな本

枯庭のどこでねてるかハルシヨン

暮色といふ色をたのしむ枯薄

ゆうべ来て初鴉まへと鳴いてゆく

元日をはる色残す空風荒ぶ

天空を歩く足音鴨引けり



てのひらに胃の腑のあり處齎打つ

草かんばし麒麟の膝の坐り胼胝

初夏の日に溶けさうな新生兒

呼出の涼しくしたる草箒木

妙齡の傳道師くる素麺どき



# トンネル

七郎衛門吉保

トンネルに弾の雨降るガザの冬  
トンネルに弾と海水熊楠忌  
少しづつ根雪の構へ白斑  
一族の集ひて笑むや菓喰  
冬に入り鰐の背見ゆる赤城山  
福岡と早明戦とおでん種  
クリスマス終つて残るマジパン菓  
想ひ出の曲多くなり十二月  
年の暮翔平聡太なほ熱し  
一年の無事の感謝の柚湯かな



ぎゆ

篠田純子

極月や築地に数多の民族ぎゆ

弥生の遺構出たけど埋める冬日影

バーボンロード煤逃げの果て目蒲線

追手捲く戸越銀座や煤逃げて

冬至札どちへ貼らうか古磁石

秋日和くち開け見入る猿の芸

赤の広場 Do Not Touch ぞカエンタケ

亥の子餅甘しひかるきみ光君の囁きも



## 温室

篠田大佳

崖下の造り庭なる石路の花

蒔蒨開花温室を出て寒し

冬明し吉良の首級しるしの赤絵の具

少年二人ゐて冬至のバス狭し

白杖を置いて漂ふ蜜柑かな

歳晚やのんびり歩く救急隊



年の暮

須賀敏子

山茶花の一輪咲いて佳き日なり

小春日やデジタル化って誰の為

大手門高き石垣風花す

碎け散る波の白さや枯岬

数へ日や正月用に本借りる

山仲間グラスビールで年忘れ

いま平和ではない年が暮れて行く



雑詠

都築繁子

短日の鎖もる時間青磁展

桜田門見下ろす椅子や冬温し

人去れる花壇のベンチ石露の花

歳末の煌めく聖樹人を待つ

银杏黄葉つとに明るし皇居前

ビル十階程メタセコイアの紅葉す



数へ日

長崎桂子

暮ちかく足元ふあん初時雨  
北風や身体いとへと急ぎ立てる  
年の暮大衆いやす発表会  
冬日の防災演習参加すくなき  
山上の水鏡思ひ出す冬  
冬の昼太陽あれば笑ひの渦  
氣候変動重大節電の冬  
木も草も元気な初冬手入れかな  
つつしみて夫の命日年末詣で  
暮の市簡素を旨に用意する  
数へ日に回顧身体検査の日日



数へ日

森なほ子

茨城産は日向の味よ落花生  
軍配はやはり千葉産落花生  
指に割り前歯に割りて落花生  
落花生殻を割りつつ記事読みつつ  
ペルシア絨毯零れた豆を隠しけり  
爪切って一人の時間冬日向  
満天星に紅を重ねて落葉かな  
宜しくと賀状に書いてまた一年  
植木屋の長き休憩日短か



冬萌ゆる

赤座典子

鎮れる冬田に光惜しみなく  
ちりちりと枝に纏る冬紅葉  
平穏な日々の遠さやレノンの忌  
太き竹杖にリハビリ冬萌ゆる  
FMは「温もり演歌」雪催  
冬柏些細な夢に支へられ  
ハーフパンツの孫はキーパー年忘  
立ち漕ぎの自転車軍団冬休  
楽しみ方変へてみやうか寒卵  
ぬひぐるみ並べ直して小晦日



雪の富士

秋川泉

幼子を担ぎ上げてのおかめ市

冬枯れの野に群れ遊ぶ雀の子

鴿の目の鋭さ増せり実ついばむ

入院の子を送りたる初時雨

切通し開けた先に雪の富士



## 秋 收 集

父母も子もおろかにてむかご落つ

佐藤 竹僊

うかうかと梅檀草につかまりぬ

秋川 泉

踊り子の袂ひらひらまあ案山子

落下するレジーナの浮遊月へ

秋の空サイダーのごと嘘はなく

七郎衛門吉保

冬日影芝生の上に武者を見る

雪女迎へに行くのスタドレス

初しぐれ七五調なる観音経

篠田純子

小灰蝶の卵さぞかし小さからむ

行く秋や誰かの旅の目的地

篠田大佳

氷雨となり子の老い様を見届ける



歌ふ子の去りし墓場をしぐれかな  
小雪や手紙の紙の縮みけり  
句座果てて銀座の街は時雨けり  
丸の内場違いなれど秋うらら  
風伝おろしと言ふ美浜町暮秋  
それぞれに背を岩に付け出湯の秋  
駅弁の酢の香車窓の冬日差し  
鳥を飼ふ普通の暮し冬の雷  
鱈酒や世相にまどひ惑ひたる  
七台載す積載車の威容冬日影

須賀敏子  
都築繁子  
長崎桂子  
森なほ子  
赤座典子

喜孝抄



## 十二月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

思ひ出を誘ひ出したる牡丹雪

亀田虎童子

失礼だが虎童子作品としては抒情味溢れる作品である。抒情ごころは誰でも持ち合はせているものであるが、作品化するとき重きをおく人とさうでない人とに分かれる。『青寫眞』に「なつかしきものなぞりつつ春の雪」があるので、掲句の心にすぐ寄り添ってしまふ。ゆっくりと降る牡丹雪は思ひ出をいざなふ雪である。(喜孝)

家系図のあるにはあるが月に雲

亀田虎童子

句意を読み取ると、「家系図はあるにはあるが、隈なき月に雲がかかっている(ように、立派なようで今はそんなに立派な家ではない)」ということであると思います。個人的に自分の家系の調査をしたことがあるのですが、歴史には波の高低がつきものだと今は理解しています。雲が晴れるのを待っている作者を想像します。(大佳)

両隣空き家となりし小六月

亀田虎童子

人口減少で、空き家が増えて社会問題になっています。私事ですが、裏の家が昨夏から空き家です。作者はなんと両隣が空き家と。空き家は物音も人声もなく、夜は真つ暗で寂しい。「小六月」

の季語がその寂しさを中和しています。(なほ子)

どうしても赤くならねばといふ蕃茄

佐藤竹僊

トマトはなぜ赤いのかという童心に対する一つの答えであると思います。血の宿命で、何としても赤くならなければならぬ、例えば白いトマトでは種を残すことができないのだなどとトマト一族の記憶が教えているのだと思うと、意識に上らない情報というのは深遠なものだと考えさせられます。(大佳)

噴水を贅となしたる秋の沼

佐藤竹僊

別所沼は昔はその名の通り沼だったのだろうが、今は楕円形に作られた池という感じ。この池を引き立てているのは二基の噴水だが、普通の噴水とは違い、いろいろ形を変えることなく同じ形を保っている。それは出口の無い沼の水の腐蝕を防ぐ為だそうだが、その姿が沼に立体感を出し、細かい水しぶきが優雅でまさに贅という感じでした。(なほ子)

秋興や釣師画伯の賑はしく

赤座典子

別所沼吟行の一場面であると想像されます。沼の周りで釣りを楽しむ人もいれば、沼の光景をスケッチする人もいます。あるいは散策を楽しんだり、運動や遊具に興じたり……。目的は違っけ

れど、同じ場所に集まってそれぞれ別のことを楽しんでいる様子に、豊かさを感じます。(大佳)

虎豆をゆっくり戻す 明日は雨

赤座典子

虎豆とはどんな豆かは知らぬが名前が面白い。煮豆はなかなか時間と根を詰めて煮ないと難しいものらしい。豆の皮にシワがよらず煮上がったときの喜びは、料理をする人だけが知ってゐる。よく妻に能書きをきかされて食べたものだ。妻の残した小豆はつひにそのまま消えてしまった。

掲句「明日は雨」にしばれた。煮豆が渋いドラマの一齣になってゐる。(喜孝)

伐採の茸あまたの 太き幹

秋川 泉

別所沼公園の光景でしょうか。大きな木にきのこがたくさん寄生しているようです。寄生を許す大木の懐の広さや、その大木を立たせる土地の懐の広さ、人間が自然を食した痕跡のある様子など、大きなものの余裕を掲句から読みます。(大佳)

道造のハウスに寄れば 秋の色

秋川 泉

ヒヤシンスハウスを知らずなほ子さんに教えていただいた。「道造のハウス」はそのヒヤシンスハウスのことだろう。夭折の詩人であり、建築家でもあった立原道造。

僕は、窓がひとつ欲しい。

あまり大きくてはいけない。そして外に鎧戸、内にレースのカーテンを持つてゐなくてはいけない、ガラスは美しい磨きで外の景色がすこしでも歪んではいけない。窓台は大きい方がいいだらう。窓台の上には花などを飾る、花は何でもいい、リンダウやナデシコやアザミなど紫の花ならばなほいい。 道造

作品で道造を識る者にはこのハウスこの家に立ち寄ればなにがしかの思ひに浸るとおもふ。「秋の色」に泉さんの心を語らせた一句。

ふき水の色なき風にシュワーシュワ

七郎衛門吉保

佐藤先生の句と同じところを詠んでおられます。噴水は夏季語なので「ふき水」とされた。「色なき風」が効いています。「シュワー」の擬音が、一秒も止むことなく吹き続けていたあの芸の無い噴水を記憶によみがえらせてくれた。(なほ子)

紅玉に口を窄めて昭和かな

七郎衛門吉保

昭和は半世紀余と永く、またその間に大戦を経て波乱の時代であったが、過ぎ去りし時への懐古心であらうか、ある種のイメージが形作られてきつつある。吉保さんの一時代前の三橋敏雄は「昭

和衰へ馬の音する夕かな」掲句の明るさを有する俳句とは趣が違ふ

掲句の「昭和かな」は戦後の昭和。作者の時代の謂。紅玉は戦後歌にも歌はれてた貴重な果物。一時は甘い林檎に押されたが今また復活したとか。東北から箱に詰められ、日本各地に送られたもの。粃殻の中に埋まった林檎はそれはそれはきれいであった。「口を窄めて」は、昭和といふ時代への懐古への表れであらう。(喜孝)

釣り人の竿の先なる秋思かな

篠田純子

俳句の技巧を心得た句。あの日も何人も糸を垂れていましたが、秋の光の中にそれぞれじっと動かない姿は秋思の語にふさわしい。手から神経が竿の先まで確かに繋がっている。(なほ子)

秋暑しなんと鰻の自販機ぞ

篠田純子

自販機で売られてないものはないか考えるくらい、さまざまなのが売られてゐる。といふことは先刻ご承知の純子さんも「鰻」にはさすがに驚かれたやうだ。別所沼吟行のをりの作品、さすがうなぎの街浦和であると感心しました。(喜孝)

晩秋やザックに汚れつば九郎

篠田大佳

私はプロ野球音痴なので、「つば九郎」がわからず、調べました。ヤクルトスワローズのマスコットなんです。夏も過ぎ晩秋。ザックに付けたマスコットかそれともプリントされているのかすつ

かり汚れた「つば九郎」。季語「帰燕」にも通じ、汚れた姿に哀愁を覚える作者。つば九郎のお茶目な顔と晩秋の取り合せがいい。(なほ子)

右耳に希望を愁思は左耳  
篠田大佳

希望に愁思を対するのは予想外の変化球である。希望の対義語は絶望。愁思といへば春秋だが、大佳さんは類型的な発想に組まない。だいいち“耳”に“希望”や“愁思”を託するのは意外で面白い。(喜孝)

秋日和鹿手袋という町に  
須賀敏子

吟行地の一帯の地名が「鹿手袋」。珍しい地名です。河川が造った袋状の地をいうそう。元は「尻手袋」が「鹿手袋」となった。知ってしまうとつまらなくなってしまうが、「秋日和」の季語により、この謎めいた地名が引き立ちます。あまり調べない方が面白いのかもしれない。(なほ子)

§

敏子さんは見知らぬ街で郵便局を見つけると貯金をするといふことを趣味にされてゐる。通帳にスタンプして、日付と郵便局名が押される。実利を伴った趣味である。その地に行くと思議な地名に出会ふことがある。そして地名の由来を知りたくなるもの。なほ子さんがすでに調べら

れてゐるので割愛。「鹿手袋」といふ地名に惹かれても奇を衒はず五七五の中に収められた。由来はともかくこのやうな地名はいつまでも残してゆきたいもの。(喜孝)

草の花ひそと原爆慰霊の碑

都築繁子

別所沼公園吟行の句でしょうか。作者は集中、好奇心の赴くままに色々な景を俳句に残していますが、ふと立ち止まって慰霊碑を眺めている静かな時間の重さを掲句から読みました。原爆投下から被曝者の名誉回復のための運動、そして語り部不足という原爆投下から現在に至るまでの歴史の重さを作者が立ち止まった瞬間より想像します。(大佳)

沼の面に浮ぶ昔日薄紅葉

都築繁子

池・湖とは違ふ言葉の雰囲気を「隠沼」は持つてゐるとおもふ。「古池や」とまでいはなくとも「沼」には時間の留まりを感じる。「隠沼」とまでいはれるほど翳がある。そのやうな沼面に昔日が浮かんでゐても不思議ではない。繁子さんの昔日を浮かべる沼面には薄紅がさしてゐる。(喜孝)

秋野菜たつぷりの食卓や嬉嬉と

長崎桂子

俳句の音節を打ち破って秋野菜の豊作を表現しています。音数は五・五・五・三と字余りになっていますが、字余りのリズムの中に、秋野菜のたつぷりさが伝わってきます。(大佳)

この道を行き祖父の墓彼岸花

長崎桂子

今歩いてゐるこの道、この道を行くと、祖父のお墓がある。この道にはおあつらへのやうに彼岸花が列をなしてゐる。墓と彼岸花と付きすぎるやうだが、「この道をゆき」といふフレーズで救われてゐる。道は多義の意味をも含んでゐる。今桂子さんは確かにこの道を歩いてをられるのである。(喜孝)

小鳥来る河童のやうな風神像

森なほ子

別所沼公園吟行の句と思われます。造形を調べると、別所沼公園に建てられている風神像は、河童のような嘴を持つ人間のような造形をしています。メキシコの遺跡から発掘された「エヘーカトル・ケツツアルコアトル」という名の風神像のレプリカを、埼玉県姉妹都市であるメキシコ州から贈られたものであるそうです。神の使いとされることもある鳥は、風変わりの像を風の神と認識しているのかもしれない。(大佳)

秋風やヒヤシンスハウス今日も留守

森なほ子

ヒヤシンスハウス寝台に秋日差し

私は立原道造の詩に触れる機会がなかったが青春時代に立原道造の詩集を読まれた人なら、突然目の前にヒヤシンスハウスが現れたならば驚き興奮することと思ふ。「今日留守」「寝台に秋日差し」と、今居られるかのやうに詠まれた。思ひの深い作品になった。(喜孝)



昭和五十八年夏 佐藤喜孝撮影

## 霞

佐藤喜孝

これが霞だ！と意識して見たことがない。だからまだ霞を見てゐない。霞と云へば大和絵に、そして詩歌句の中に知るばかり。なのに霞の句を何句が私は作つてゐた。

一米さきのかすみへ布團より

富士ひとつ上總下總初霞

恭子にもかすみの句があった。

天からの母のほほゑみ山はかすみ

講釈師見てきたやうな……といふところ。

和田魚里は句集を二冊遺した。大判で用紙は埼玉県小川町で漉かれた細川紙に大きな活字と贅沢三昧の句集である。家を去るときいくつかの見つけからずあきらめたもの一つにこの句集の一冊があった。何十年も住んだ家から一か月ぐらいで大事なものを取捨選択するのは無理で

あった。「再機」は連れてきたが「機」はネット  
で求めた。○○様恵存と染筆されてあった。調  
べたら著名な僧であった。あらためて眠れぬ夜  
の楽しみが増えた。

生前は霞まねばならぬかな

死は生の景色の一部春の風

死ねばはつきりするので今は霞んでいる

と、春の風の句を挟んで霞の句が並ぶ。

ふと、『梁塵秘抄』の「遊びをせんとや生まれけ  
む 戯れせんとや生まれけむ」といふ断片が浮  
んだ。同じやうなことを云つてゐるかにみえる  
が「霞まねばならぬかな」は見事。魚里俳句は  
五七五も季語もお構いなしにつきすすむ。「霞ま  
ねば」は大方季語から逸脱し、五五五と韻律お  
構ひなし。それでも楽しく読める。

熱爛や威張らせねえとあそばねえぞ

といふ句を吐く人には適はない。

あとがき

表紙

「春の夜を道成寺村の旅籠屋の布團なまめきいねがてぬかも」と著名な道成寺の仁王門が刻された版画。「ぼるが」主人の高島茂さんからいただいたもの。いただいた折に作家名を聞いたと思ふのだが忘れてしまった。落款を見つめても読めない。作家が不明でも作品の魅力は損なはれない。俳句も作家名を負はなくとも魅力のある俳句は本物。道成寺の安珍と清姫の物語を知る人は「布團なまめき」に興を覚へる。

和田魚里の写真

26頁の写真は霞の俳句作者、和田魚里。『再機』に収まつてゐる。よく審美眼のある魚里の眼鏡になつた写真を撮れたものだと感じた。

買物難民

リハビリで隣り合つた人が近所のスーパーが閉店になると危惧してゐた。スーパーが小売店を潰しそ

してスーパーが潰れて買物難民が練馬区で案じてゐる人がゐる。過疎地だけの問題ではない。私は買物の便を考へてスーパーの傍に住んだ。しかし来天候が続いたり重い買物はネットを利用してしまふ。ある過疎村ではタブレットを貸与し買物に不便を感じてゐない。ネット環境があればみな同じやうに暮らせる。と錯覚してしまふ話だ。(喜孝)

二〇二四年二月号

発行日 二月二十二日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

竹僊房

印刷・製本・レイアウト

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)

